きい、伸長多蘖な品種を用いた方が有利である。その点からみて、前進、ビクトリー一号、ホワイトターター、雪印改良燕麦物である。豌豆は一般に草の量の多い赤花系の日本赤、または蔬菜用の仏国大莢等が優れており、特に青刈用品種としてのオーストリアンウインターピースは分枝数多く、晩生で利用期間も長く良好である。

播種量は反当り燕麦八升～一斗、ベッチ五～六听、または豌豆五升前後を混合し一・五～一・七尺の条播とし反当り施肥量は堆肥四〇〇貫前後、硫安四～五貫、過石五～六貫、硫加一～二貫がよい。

刈取りは播種後六十日目頃の燕麦の出穂前後から始まり三～四週間で終る。収量は反当り生草で一、〇〇〇～一、五〇〇貫が普通である。跡地は一般秋播用畑として十分利用され、特に飼料用かぶを栽培するときは二毛作も可能である。

（筆者は雪印種苗・上野幌育種場長）

晩春より初夏にかけての青刈作物と刈取可能期間（札幌附近）

作物＼月旬	5月 上	5月 中	5月 下	6月 上	6月 中	6月 下	7月 上	7月 中	7月 下	8月 上	8月 中	8月 下
赤クロバー（チモシー・オーチャード）					1番刈（30日）						2番刈（25日）	
ルーサン（アルファルファ）（ブロームグラス）			1番刈（20日）					2番刈（25日）				
レープ			（20日）									
青刈ライ麦（ヘアリーベッチ）			（20日）									
スエートクロバー			1番刈（20日）			2番刈（20日）		3番刈（20日）				
青刈燕麦（コンモンベッチ・赤花エンドウ）							（25日）				かぶ（秋收り）播種	

註 1. （　日）青刈可能期間及日数
2. 作物欄中（　）内は混作播作物

（スワロフステール）等が適当である。

ベッチはヘヤリー、クサフジ、コンモン等いずれでもよいが寒害の心配のない点、大莢、茎太多収の点からみてコンモンベッチが適当である。また酸性地でなく、適度の湿気のある土地では豌豆もきわめて生育が早く多収であり、ベッチに代つてよい作

春播いてその年の内に数回放牧できる

スーダングラス

先にスーダングラスについて紹介され、集約的な栽培として主として青刈利用について述べられたが、最近のアメリカにおけるスーダングラスの利用は専ら放牧用となつてきた。それは放牧用として左の利点を有しているからである。

1　春遅く播いてその年の内にしかも秋おそくまで数回にわたり放牧ができる。スーダングラスは稚苗時霜に弱く播種期は玉蜀黍播種後であるが、気温の上昇につれてその生育は目覚しく、暖地四月上旬播きで六月中下旬から、寒地では五月下旬播きで七月中、下旬から放牧を開始できる。完全に刈取つた場合でも元通り回復するのは約三十～五十日後であるから、輪換式に放牧すれば晩秋まで連続放牧が可能である。

2　一般の放牧地に播く禾本科牧草は播種当年はもちろん、盛期に入るのには三年を要するので、なかなか更新はやつかいであるが、一方にスーダングラスの放牧地を用意し逐次前記の放牧地を更新すれば、放牧地面積を減少することなく実行できる。またこれらにスーダングラスを若干混播すれば初年目の収量をも補うことができる。

3　スーダングラスは夏季の高温、暑熱につよく、この時期には他の放牧草はやや生長がおさえられる。

4　スーダングラスは分蘖旺盛、しかも刈取りまたは放牧により痛められても回復早く、チモシー、オーチャード等に比し葉幅広く収量が多い。

5　スーダングラスは一年生であるから放牧後は鋤きおこし輪作の中に組み入れることができる。

6　播種期が遅いため作業上都合よく、また事前に圃場の除草を十分行うことができる。また繁茂する速度が大であるため他の雑草をおさえることに役立つ。

右の理由から応急の放牧地用として大いに利用されることを希望する。

播種期は寒地五月下旬、暖地四月上旬、播種量は反当六～七升、よく除草、整地された圃場に撒播し、ハローを縦横に通して覆土する。施肥は多い方が望ましく、堆肥五～六〇〇貫、硫安三～四貫、過石四～五貫、加里一貫程度は是非入れたい。約五～六〇日後に草丈三～四尺に及ぶからこの頃から放牧を始める。電気牧柵等利用すればなお理想的である。家畜の嗜好はきわめて良好であるが、あまり若い時は過食すると中毒することがあるから注意しなければならない。

労力の節約がさけばれているとき、かかる手数のかからぬしかも多収な放牧地を是非つくつてもらいたいものである。

（なかの）